魔力ゼロの出来損ない貴族、四大精霊王に溺愛される

vol.4

MARYOKU ZERO NO
DEKISOKONAI KIZOKU,
YONDAI SEIREIOU NI
DEKIAI SARERU

Sora Hinokage
日之影ソラ

Illustration
紺藤ココン

登場人物紹介

◇◆◇ ニーナ ◇◆◇

シクロレーザ王国第一王女。先を見通す未来視を持つ。

◇◆◇ 魔王 ◇◆◇

アスクの魔力と感情から生まれた魔王。人間を強く憎んでいる。

◇◆◇ バーチェ ◇◆◇

悪魔の子供。魔導具作りが得意。クウという名の狼の魔物を生み出す権能を使える。

◇◆◇ ルリア ◇◆◇

アスクの妻であり、一番の理解者。精霊と契約しており、強力な風魔法を操る。

◇◆◇ サーシャ ◇◆◇

悠久の時を生きる吸血鬼。自らの血液を使役して戦う。

◇◆◇ アリア ◇◆◇

聖剣に選ばれし勇者。少女とは思えない破天荒（はてんこう）な戦いぶりで、あらゆる敵を蹴散（けち）らす。

◇◆◇ アスク ◇◆◇

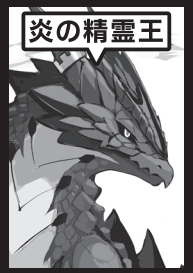
魔力も感情も持たず生まれた少年。四大精霊王に見出され、最強の力を手に入れる！

◇◆◇ 四大精霊王 ◇◆◇

シルフ

ウンディーネ

ノーム



サラマンダー

プロローグ

どこまでも続く清らかな青い空。
漂う雲を眺めながら、ふと一人の英雄を思い浮かべる。

今日はとてもいい気分でした。
だから少しだけ、ほんの少しだけ昔話をしましょうか。
とある貴族の屋敷で、一人の男の子が誕生しました。
その家は魔法使いの名家で、生まれてきた子供には大きな期待が向けられました。
けれど、その男の子には大きな問題がありました。
そう、彼には人間であれば必ず持っているものが欠落していたのです。
男の子に足りなかったものは、魔力……。
魔力を持たずに生まれたことは一般的に恥ずべきことで、嘆かれて然るべきこと。
事実、男の子は魔法を一切使うことができず、優秀だった兄と比較しても、明確な落ちこぼれで

した。
ですが、周囲が恐れたのは男の子が魔力を持たずに生まれたことではありません。
彼には……感情がなかったのです。
どれだけ怒られようと、悲しむことはなく、傷つくこともない。
喜びも、達成感もない。
彼の父親は、自分の息子に対して厳しく接しました。
父親自身にも、その自覚がありました。
しかし男の子……成長して少年になっていた彼にどれだけ怒りをぶつけても、返ってくるのは無機質な笑顔だけでした。
本当に不気味だと……怖いとすら思ったでしょう。
次第に少年の周囲から、人の姿が消えていきました。
少年は別荘に隔離され、誰とも深く接する機会を与えられず、一人で生きていきました。
しかし彼はそれを悲しいとも、思えなかったのです。

そんな彼は、運命の出会いを果たします。
偶然か……いいえ、必然でした。

彼は出会ったのです。
世界を見守る大いなる力……精霊たちの王に。
炎の精霊王サラマンダー。
地の精霊王ノーム。
水の精霊王ウンディーネ。
風の精霊王シルフ。
かの王たちと契約を結ぶことで、空っぽだった彼の心は満たされていきました。
そうして彼は感情を手に入れ、これまでの人生を振り返ります。
怒りが、悲しみが、苦しさが込み上げました。
このままじゃ駄目だと思った彼は、精霊王たちとともに旅に出ることを決意しました。
精霊王たちに世界を見せるために。
生まれた場所を飛び出し、もっと自由に生きるために。

感情を持たず、空っぽで生まれた男の子の名は――アスク・マスタローグ。
彼は空っぽであったがゆえに、精霊王たちの力を受け入れる器となれたのです。
そうして多くの出会いを経て、魔王と戦い、自身の影とも呼べる存在とも対峙して、私を……

人々を救いました。

「アスク様、必ずまた……会いに来てくださいね」

私――ニーナは空を見上げてそう呟いた。

雲は自由に漂い、決して捕まえることはできない。

王女という地位があろうとも、たとえ未来が視えていても、私に彼をとどめることはできない。

悲しくもあり、それでいいとも思った。

そんな彼だからこそ、私は惹かれてしまったのだから。

私は笑った。

いつか訪れるであろう幸福な未来を信じて。

◇◇◇

王都内にあるマスタローグ家の屋敷で、俺は一人荷造りをしていた。

ホームである、サラエという街に帰るべく。

なぜそもそも王都にいたのかといえば、以前、暗黒大陸と呼ばれる、人類が足を踏み入れたことのない地へ赴き、自身と瓜二つの容姿をした魔王と戦ったことが発端だ。

その魔王の正体は、俺が失ったはずの感情と魔力が形を成したもの。

戦いは熾烈を極めたが、それでもなんとかやつを退けた。

今回はその一連の経緯を国王に報告するべく、この王都を訪れていたというわけだ……が、イレギュラーな事態が起こったせいで、だいぶ長い滞在になってしまったな。

イレギュラーな事態とは、魔王が王都を襲うであろうことが判明してしまったことだ。

未来視を持つこの国の王女・ニーナ姫が、そういった未来を視たのである。

一年で最も王都が色めく『建国祭』。その日に魔王が王城を襲来する未来を、ニーナ姫は視たのだ。

魔王を迎撃するため、俺は王城で働くことに。

姫様の仕事を手伝いつつ目を光らせていたのだが、建国祭の前日、事件は起こった。

魔王の手下が、王都を襲撃したのだ。あらゆる場所で爆発が起こり、街は火の海。

そんな時、颯爽と妻であるルリア、パーティーメンバーのリズとラフラン、そしてバーチェ、S級冒険者であるアリアとセシリーが駆けつけてくれたんだよな。

呼んだわけじゃないのに、帰りが遅い俺を心配して、わざわざ遠く離れたサラエの街から来てくれたのだ。

本当に嬉しかった。
離れていても、心は通じ合っているのだとわかったから。
そしてその翌日、魔王本人が襲撃してきた時にも、みんながいたから勝利を収められたんだ。
……大変ではあったけど、この一件も楽しい思い出になったな。
ともあれ、責務は果たした。まだ身体が完全には回復し切っていないが、早くサラエに帰らねば。
「アスク、もう戻るのか」
暗黒大陸で偶然再会し、王都に一緒に来てくれた実兄――ライツ兄さんがそう聞いてくる。
「そのつもりです。ここで俺がすべきことは、もうありませんから」
「それはそうだが、まだ戦いの疲れは完全に癒えていないだろ？　今日一日くらいは休んで、明日出発にしたらいいのに」
ライツ兄さんは相変わらず優しい提案をしてくれる。
俺もその厚意に甘えたくはある。
ただ、同時に迷惑じゃないかとも思ってしまう。
「嬉しいですけど、俺が残ることでみんなも帰れなくなってしまいますからね。それに、さすがにこの人数を何日も泊めてもらうのは気が引けますし」
「そんなの気にしなくていい。ここはお前の家でもあるんだから」

「……」
俺は一度、この家を捨てている。
自由に生きると決めて、二度と戻らないと覚悟した。
こうしてまた屋敷に足を踏み入れられたのは、ライツ兄さんと偶然再会できたことが大きい。
兄さんと再会していなければ、少なくとも自分のほうから屋敷に戻ることはなかった。
建国祭の前日にみんなを泊めてもらっただけでも俺としては少し申し訳なさがあった。それをさらにもう一日なんて……わがままなんじゃないかと思ってしまう。
押し黙る俺を見て、やれやれと兄さんは首を振った。
「だったら父上に聞いてみたらどうだ？」
「お父様に？　でも……」
「いいから！　屋敷の主がいいのなら、お前が遠慮する理由はないはずだ」
「……わかりました」
俺は兄さんに連れられ、当主であるお父様の元へと向かった。
お父様は執務室で仕事をしていた。
兄さんはノックして中に入ると、俺の代わりに事情を説明してくれた。
「――というわけです。父上、アスクたちを屋敷に泊めても問題ありませんよね？」

「もちろんだ」
「……」
「ほらな」
いともあっさり、お父様は了承してくれた。
俺は驚きのあまり呆ける。
「いいんですか？　お父様」
「ん？　何か不安でもあるのか？」
「いえ……大人数なので迷惑になるかと思ったのですが」
「たかだか数名を二日間宿泊させられないほど、この屋敷は狭く見えるか？」
「そんなことはありません」
「ならば気にすることはない」
使用人を含めると、この屋敷には二十名ほど人がいる。
それでも部屋は大分余っている。
でも、俺が気がかりなのはそういうことではない。
「……」
本当にいいのだろうか。

これ以上を望んでいいのだろうか。
俺はどこまで歩み寄ってもいいのだろう。
「父上、アスクは遠慮しているんですよ」
「遠慮？　……そういうことか」
お父様は何かを察したように、小さく深くため息をこぼす。
そうして俺に顔を向け、まっすぐに見つめながら口を開く。
「遠慮など不要だ。ここはお前が生まれた場所で、お前の家でもあるんだからな」
「お父様……」
「だが、お前にはもう自分の家がある。無理強いはしない。居心地が悪いというなら、気にせず好きな時に出ていくといい」
そう言ってお父様は視線をそらした。
少しだけ、お父様の横顔が寂しそうに見えたのは、気のせいではないだろう。
「居心地は……悪くありません」
「アスク……」
「少なくとも今は……息苦しさも、悲しさも感じません。あ、また感情を失ったからってことではありませんよ？」

「――ふっ、安心した」
お父様が笑った。
俺の軽い冗談を受け入れてくれたことが、俺も嬉しかった。
申し訳なさがどこかへ消えていく。
お父様も、兄さんも、遠慮なんてしなくていいと言ってくれた。
ならばもう、躊躇う必要もない。
「では、出発は明日にします」
「わかった。夕食の用意をさせよう。もちろん、皆の分も含めて」
「はい」
夕飯が楽しみだ。素直にそう思った。

◇◇◇

あっという間に夕食の時間となった。
ルリアたちを連れて食堂に行くと、豪勢な食事が並んでいた。
昨日は急にみんなを連れていったからか、さほど高級な料理って感じではなかったが、今日はそれとは比べ物にならないくらい豪華だ。もしかすると、お父様は今日俺たちが泊まっていくことを想定していたのだろうか。
お父様が気を利かせてくれたのだとしたら、嬉しい。
みんなも、目を大きく見開いて驚いている。
そしてリズとバーチェは子供みたいにはしゃぎ出す。
「お兄さん！　こんなにいっぱいあるぞ！」
「おい、アスク！　これ、全部食っていいのか？」
「みんなの分もあるから、一人で全部は困るぞ。まぁさすがに身体のサイズを考えると、全部食べ切るのは無理だと思うけど」
「な、なめんなよ！　このテーブルごと食いつくしてやる！」
「お腹を壊すからやめてくれ……」
「ふふっ、相変わらず賑やかね」
セシリーがお上品な笑顔を見せる。
彼女は、こういう雰囲気の場所にも馴染んでいる。ドレスなんかを着たら、貴族の令嬢と思われるだろう。
対してアリアはワクワクした顔で、早速椅子に座っていた。

「いつまで話してるの？　早く座って食べようよ！」
「はいはい」
アリアにせかされて、セシリーが彼女の隣に座る。
当主であるお父様が奥の席に座り、その左右に俺と兄さんが座った。
ルリアは俺の隣にやってきて、腰を下ろす。
全員が席についたところで、お父様が口を開く。
「みんな、揃ったな」
「はい。お父様」
「うむ。では皆、存分に楽しんでくれ」
お父様の合図をきっかけに、楽しい食事の時間がスタートした。
バーチェは待てをしていた子猫のように、早々にお肉にがっついている。
「美味いなこれ！　こっちも美味い！」
「急いで食べると喉に詰まるぞ」
「大丈夫だっ……うっ！」
「言わんこっちゃない。ラフラン」
「は、はい！　バーチェちゃん、お水飲んで」

バーチェの隣に座っていたラフランが、水を飲ませてやってくれた。
ごくごくと水を飲み、なんとか喉のつかえが取れたバーチェが大きく息を吐く。
「はぁー……死ぬかと思った」
「気を付けてくださいね」
「おう！　ありがとな、ラフラン！」
「落ち着いて食べろって言っただろ？」
「うるさいなー！　だって美味すぎるんだ！　こんなもんアスクは毎日食べていたのか！　ずるいぞ！」
「今日は特別だよ」
俺はお父様のほうに向き直り、軽く頭を下げる。
「ありがとうございます。お父様」
「準備したのはシェフだ。が、口に合ったのならよかった」
そう口にするお父様の口元が僅かに緩んでいるのがわかった。
視線を向かい側の席に移す。
すると、先ほどまでのバーチェとラフランたちのやり取りと似たようなやり取りが行われていた。
「美味しい！　美味しい！　セシリーもいっぱい食べなよ！」

「食べてるわよ。それよりも、頬についているわ」
「え？　取って！」
「もう、子供じゃないんだから」
アリアの頬についたソースを、セシリーが優しく拭いてあげた。
嬉しそうに笑い、またパクパクと食べ始めるアリアを見て、セシリーは呆れたような笑顔を見せる。
ふと、セシリーと視線が合った。
「お互い大変だな」
「ふふっ、そうね。もう慣れてしまったわ」
「なんのこと？」
「子供のおもりは大変ねって話」
「ん？」
アリアは理解していないのか、きょとんと首を傾げた。
やれやれと俺たちは首を振る。
すると兄さんが笑いながら言う。
「ははは っ、さすがにこの人数集まると賑やかだな」

「賑やかなのは嫌いですか？　兄さん」
「まさか。いいもんだな、こういうのもさ」
「そうですね」
みんなが一つのテーブルを囲んで、仲良く話しながら食事をしている。
平和と穏やかな日常を象徴するかのような光景だ。
「お前のほうはホームに帰っても、同じ光景が見られるんだよな」
「はい。それどころかホームにはもっと大勢の家族がいるので、更に賑やかです」
「ああ、そうだったな」
ルリアたちはかつて世界中を転々としながら、冒険者をすることで世の中から迫害されていた亜人の仲間たちを養っていた。彼らは今、俺らと一緒の家に住んでいる。
兄さんがサラエに来た時、家に来て家族にも会わせた。その時、兄さんは子供たちにいたく気に入られていたっけ。
兄さんは優しく微笑んで、少し寂しそうに呟く。
「お前を羨ましく思うよ、アスク」
「兄さん……」
「俺は明日も任務だ……」

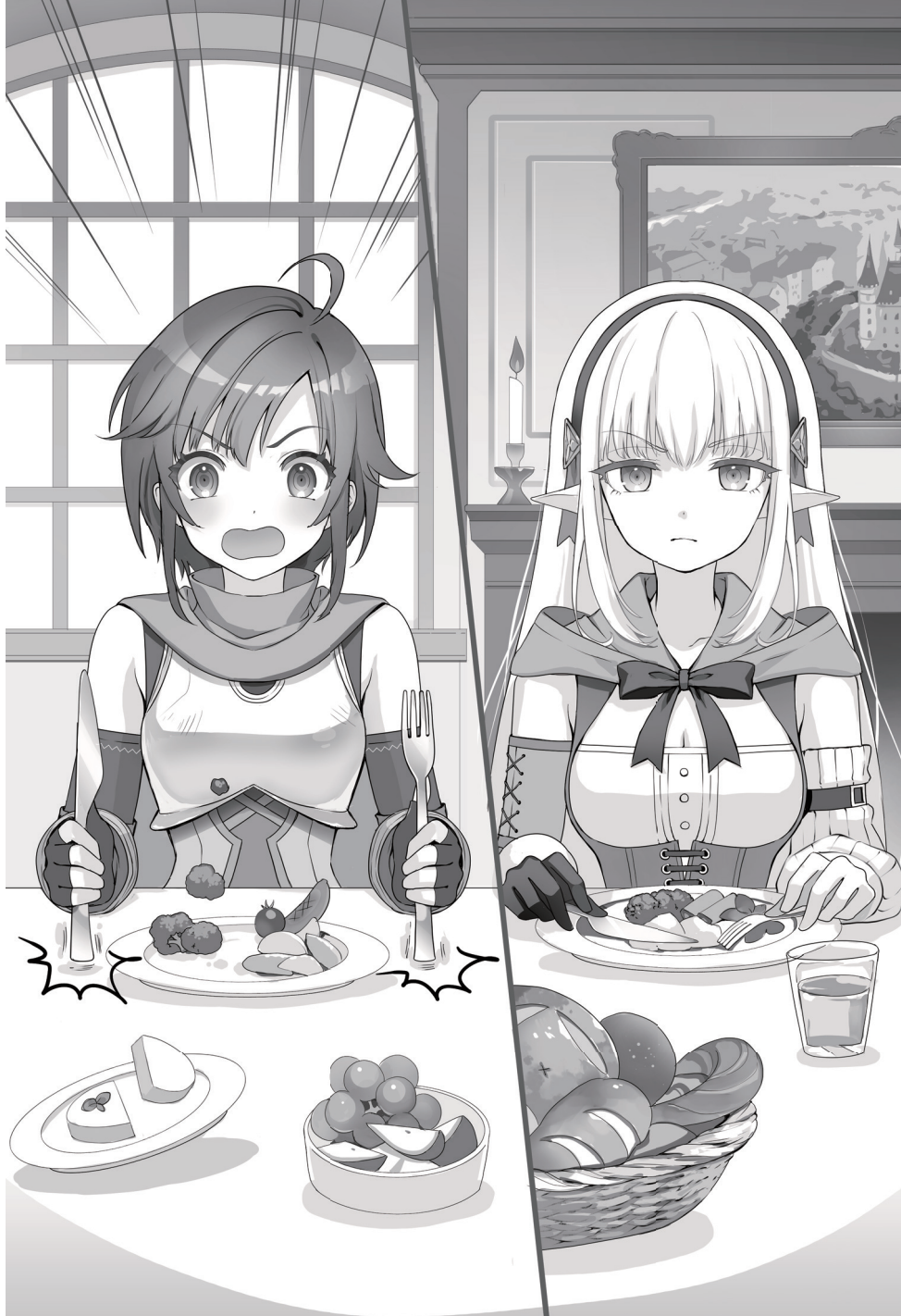
俺たちの話を聞いていたのだろう。お父様が、兄さんの表情を窺う。
それに気付いた兄さんが慌てたように言う。
「別に今の日々に不満なんてありませんよ？　人のために働けることにやりがいも感じています。ちゃんと充実した毎日が送れていると思います」
「そうか」
「はい。それでもアスクを羨ましいと思うのは、今のアスクが誰よりも人生を謳歌しているのがわかるからでしょうね」
兄さんは誇らしげに語る。
「俺はこいつと旅をして、一緒に戦って、いろんな話をしました。アスクは変わりましたよ。俺たちが知らない場所で多くの出会いを経て、成長したんです」
「……はい」
兄さんの言う通りだ。
俺は成長した。
ルリアたちと出会い、帰る場所を手に入れた。
アリアたちをはじめ、ともに肩を並べて戦える仲間を手に入れた。
兄さんと再会して、長年ため込んでいた感情を吐き出し、こうして故郷に戻ってくることもで

きた。
そう、確かに充実している。
俺は人生を謳歌している。
なんの不満も、後悔もない。
「大丈夫ですよ、兄さんにもきっと、いい出会いがあるから」
「こいつ……弟の癖に上から目線だな」
「既婚者ですから」
「ははっ、そうだったな。いい人を見つけたよ、お前は」
「ええ」
心からそう思う。
ルリアが俺の心を支えてくれている。
みんながいるから、俺は今日を笑って生きられるんだ。
「ライツ、見合いの話ならいくつか来ているぞ」
「え？」
「よかったですね、兄さん」
「いや……大抵は家柄とか名誉目当てで、会ったこともない相手だからな……正直、あまり嬉しく

はないんだよ」
「そうなんですね。気持ちはわかるけど……いいんですか？　そんなことお父様の前で言っても」
「構わない。知った上で聞いている。念のためだ」
俺は少し驚いた。
家柄や地位、名誉を大切にしているはずのお父様が、兄さんの今の発言に対して怒らないなんて。
俺が去ったあと、お父様の考え方もずいぶん変わったらしい。
貴族としていいことなのかわからないけど、俺は嬉しかった。
なんだか今の自分を、肯定してくれているような気がして。
「そういや、アスク！　姫様とも話したんだろ？　なんて言ってた？」
「な、なんてって？」
「とぼけるなよ。あれだけ熱烈にアプローチされてたんだ」
「あー……」
「姫様はあれで芯のあるお方だ。一度決めたことは最後までやり通す意志がある。お前のことも、あっさり諦めるとは思えないんだが？」
「……そうですね」
俺は苦笑いをする。

ニーナ姫は、俺のことを運命の相手だと言った。
ニーナ姫は、俺との未来を視た上で、だ。
その上で、俺を未来の夫だと国王に紹介までした。
あの時は心からドキッとした。
もちろん、冷や汗をかく的な意味合いで。
「お前は王都を救った英雄だ。今なら陛下も、姫様がお前と結婚すると言ったとして、強く止めないだろ」
「結婚⁉　アスク君、また結婚する気なの！」
食べることに夢中になっていたはずのアリアが、この話題には大きく反応した。
当然、隣に座っていたルリアも。
「聞いていないわよ、アスク」
「ちゃんと話すつもりだったよ。先に言っておくけど、もう断っているから」
「そうなんだ！　よかったぁ……またライバルが増えるのかと思った」
「求婚されたのは事実なのね」
「まぁ……うん」
俺は二人に、王都で何があったのかを詳しく話した。

魔王関連のことは既に共有してあったけど、姫様との出会いや、彼女が俺を好いてくれていることについては伝えていなかった。
別に隠していたわけじゃない。
話すタイミングがなかっただけで、ちゃんと説明するつもりはあったんだ。
もっとも、この状況では言い訳にしか聞こえないが……。
「悪い、まだ伝えてなかったのか」
「大丈夫……」
兄さんがこっそり謝ってくれた。
兄さんは悪くない。言わずに放置していた俺が悪い。
話が終わり、アリアが大きなため息をこぼす。
「はぁ……アスク君って、どこに行っても優しいんだよね。その優しさをみだりに使うのって、とっても危ないんだよ？」
「そ、そうなのか？」
「そうだよ！　反省してほしいな！」
「あ、はい。すみません」
なぜかアリアに怒られてしまった。



ルリアは呆れてため息をこぼす。
「アスクのことだから覚悟してたけど、まさか今度は姫様まで……」
「ちゃ、ちゃんと断ったから！」
「でも、諦めないって言われたんでしょ？」
「まぁ……うん」
姫様は俺のことを諦めないと言っていた。
未来は変わらないものだと思い込んでいた彼女は、変えられた未来の存在を知り、希望を持った。
間接的に、俺が勇気を与えてしまったようなものだ。
「はぁ、でも断ったのは偉いわ」
「当然だろ？　俺にはルリアがいるんだから」
「そうね。浮気なんて絶対に許さないもの」
「私だっているんだよ！　アスク君の一番になるって決めたんだから！」
意気込みながらも食べる手を止めないアリアに、セシリーが呆れて言う。
「食べるか喋るか、どっちかにしなさい」
「うん！」
……食べるほうを優先したな。

兄さんが笑う。
「ははは っ！　本当に賑やかで楽しいな」
「――そうですね」
こうして夕食の時間が過ぎていく。

◇◇◇

深夜になり、みんなが寝静まった頃。
俺は一人、ベランダでくつろいでいた。
「ふぅ……」
「眠らなくてもいいのか？　アスクよ」
「サラマンダー先生！　はい。目が冴えてしまって」
「眠っておいたほうがよいぞ？　明日からまた長距離の移動じゃ」
「わかっていますよ、ノーム爺」
「今夜は少し冷えるわ。風邪をひく前に部屋に戻りなさい」
「俺はそこまで弱くないですよ、ウンディーネ姉さん」

「みんなアスクが心配なんだヨ！」
「もちろん感じています、シル」
炎の精霊王サラマンダー。
地の精霊王ノーム。
水の精霊王ウンディーネ。
風の精霊王シルフ。
俺と契約してくれている偉大な精霊王たちが、夜空を舞うようにぐるぐると俺の周りに姿を見せてくれた。
「よかった。今日はほとんど声が聞けなかったから、心配していたんですよ」
「家族や仲間との時間だ。邪魔しては悪いと思っていた」
「ワシらなりに気を遣ったんじゃよ」
それぞれそう口にしたサラマンダー先生とノーム爺に俺は軽く頭を下げる。
「そうだったんですね。すみません」
「気にしなくていいわ。だって……」
「嬉しいからネ！　アスクが楽しそうにしているのが！」
嬉しいという感情も、彼らが俺に与えてくれた宝物だ。

どれだけ時間が経過しようと、彼らへの感謝は薄れることはない。
だから一日声が聞こえないと、少し不安になるんだ。
「何を不安になることがあるのじゃ」
「我らは常にお前を見守っている」
「はい」
「……だが、時折ふと思うことがある」
「先生？」
「今のアスクは、我々がいなくても生きていけるだろう、と」
「――！　何を言っているんですか！　俺は！」
「それだけ大人になったってことだヨ！」
慌てた俺の顔の前に笑顔で移動してきたシルが、そう言った。
俺は呼吸を整える。
「そう……ですね。すみません」
「サラマンダー、アスクを不安にさせてどうするのよ」
「む、すまん。他意はない」
わかっている。先生たちは俺を見捨てるなんてこと、しない。

ただ俺の成長を感じてくれているだけだ。
「……俺は、みんなが一緒にいてくれるから強くなれたんです。だからこれからも、俺のことを見ていてほしいです」
「アスク……」
「そうじゃのう」
「ええ」
「そのつもりだヨ！」
「ありがとうございます」
星空の下、俺は改めて胸に刻む。
彼らと出会い、精霊王の契約者になったことを。
この力を以て成すべきことは、まだ残っているのだ。

第一章　四季の古城

マスタローグ家の屋敷で一夜を過ごし、翌日の早朝。
俺たちは荷造りを終え、出発の支度を整えた。
これからサラエの街へと帰還する。
懐かしい我が家へ。
かつて生まれた場所から、これから生きていく居場所に戻るのだ。
兄さんが馬車の荷台へ木箱を積んでくれている。
中身は食料や、日常生活で使う消耗品など多数。
「よし、あと一つ」
ライツ兄さんの言葉に、リズが手を挙げる。
「ボクも手伝うよ！」
「気にするな。これから長旅で疲れるんだ。力仕事は大人に任せておけ」
ぽんぽんとリズの頭を撫でるライツ兄さん。

リズは満更でもない様子だ。
「なんだかお兄さんみたい！」
「ん？　俺は兄だぞ？」
「そうじゃなくて、アスクお兄さんにそっくりだなって思いました！」
「ああ、それは当然だろ？　俺たちは兄弟なんだから」
僅か数日の交流で、すっかり兄さんはリズたちとも仲良くなっていた。
兄さんは俺よりもコミュニケーション能力が高い。
そして根底にあるのは、分け隔てない優しさ。
そう、兄さんは優しい人だ。
かつて感情を一切持たない欠陥人間として生まれた俺のことを、同じ人間として見てくれていた唯一の人。
俺が運命の人に出会えたように、兄さんにも素敵な出会いがありますように。
「ん？　何か言ったか？　アスク」
「なんでもないですよ。それより食料、こんなにもらっていいんですか？」
「父上からの厚意だ。受け取らないと悲しむぞ？」
「それを言われると、何も言い返せませんね」

「ははははっ！　この人数で移動するんだ。食料は多いほうがいいだろ？」
俺と兄さんは馬車の周りで談笑する彼女たちに視線を向ける。
王都に戻ってきた時は、俺と兄さんの二人だけだったのに、帰りはみんな勢揃いだ。
行きは空を飛んで移動したが馬車を使い移動する関係上、行きよりも時間がかかるだろう。
ここは厚意に甘えるとしよう。
「はい、ありがとうございます」
「礼は俺じゃなくて、父上に言ってあげてくれ」
「そうですね」
俺は屋敷の二階、お父様の執務室に視線を向けた。
忙しい身分だから、今も仕事に打ち込んでいることだろう。
見送りに来てもらえないのは……少し寂しかった。
と、視線を下げようとしたところで、執務室の窓が開く。
「お父様」
窓からお父様が顔を出した。
俺を見下ろし、何か言いたげにじっと見つめている。
ただ、じっと待つ。

お父様の言葉を、聞き逃さないように。
「アスク」
ようやく口を開き、俺の名前を呼んだ。
俺は答える。
「はい」
「……食料は足りるか？」
「十分です。俺たちのために用意していただき、感謝いたします」
「その程度のことは気にするな」
再びの静寂。
きっと、本当に伝えたいことは言えていない。
家族だからかな？
感情を手に入れて、たくさんの人と交流した今ならわかる。
俺のお父様は、口下手な人なのだと。
だから待つ。
ゆっくりと流れる時間の中で、そんなお父様からの言葉を……。
「また……」

「……」
「いつでも戻ってくるといい。歓迎しよう」
「――はい！　必ず」
お父様からの不器用な優しさを受け取って、思わず心が温かくなり、涙がぶわっとあふれそうになった。
俺はぐっと涙をこらえ、笑顔を見せる。
するとお父様は窓を閉じて、仕事に戻っていった。
「まったく、不器用な人だよな」
「ええ。でも、ちゃんと伝わりました」
「よかったな」
兄さんがぽんと俺の肩に手を置いた。
王都に戻るのはただの義務だと思っていたが、この期間で俺はたくさんの宝物をもらった。
とても充実した数週間だった。
去るのが少し名残惜しいが、俺たちには帰るべき場所がある。
既に馬車の準備は終わっていた。
あとは出発するだけ。

「じゃあ兄さん」
「ああ、また――ん？」
「どうかしましたか？」
「誰か来る。あれは……」
兄さんの視線の先――騎士団の制服を着た男性二名が、こちらに向かってきていた。
少し警戒する。
そんな俺の代わりに、兄さんが前に出てくれた。
「なんの用だ？」
「アスク・マスタローグ様に姫様よりこちらを預かっております」
「姫様から？」
兄さんが俺のほうに視線を向ける。
俺は頷き、前に出る。
「受け取ります」
「こちらです」
手渡されたのは一通の手紙だった。
中身を確認する。

別れの挨拶かと思ったが、どうやら違ったようだ。
兄さんも見る。
「依頼書だ。騎士団や魔法師団に向けて配られるものと同じ形式の」
「じゃあ兄さんへの依頼書じゃないんですか？」
「いいえ、姫様よりアスク様にお渡しするようにと」
どうやら間違いではない様子だった。
騎士たちは俺たちに頭を下げる。
「では、我々はこれで失礼します。どうされるかは、アスク様にお任せするそうです」
そう言い残して、騎士たちは去っていってしまった。
任せると言われても困るんだが……。
改めて内容を確認する。
依頼内容は謎の建造物の調査だった。
ちょうど俺たちが祭りの準備をしていた頃、王都とサラエの中間地点から少し北へずれた場所に、謎の建造物が出現したらしい。
山と森の境に出現したそれは、巨大な岩の塊のようにも、角張った建造物のようにも見えた。
それを調査すべく、既に一度騎士団が派遣されている。

しかし、建造物には近寄ることすらできなかった。
「建造物の周囲には強力な結界が展開されており、物理的手段での突破は不可能と判断。魔法師団への依頼を検討している……って、俺たちへ依頼する予定だったのか」
依頼書を読み終えた兄さんが、そう口にした。
「そうみたいですね」
ただ結界が張られているだけであれば、魔法師団が対応できるだろう。
兄さんは続ける。
「しかし、ニーナ姫の進言により、アスクたちに依頼することに……とある」
なぜ俺に依頼してきたのか。
あの姫様のことだ。無意味なことをするとは思えない。
なんらかの意図があるのだろう。
「どうする？　任せるって話だし、断ってもいいぞ？　お前たちも疲れてるだろ？　元は俺たちへの依頼だったみたいだしな」
「……いや、引き受けますよ」
「いいのか？　方角は同じだが、若干遠回りになるんだぞ？」
「ええ。姫様からのお願いみたいだし、俺も少し興味がありますから」

突如として現れた建造物……しかもそれは結界で阻まれているときた。
俺たちが王都へ来たくらいのタイミングに生じたという事実からも、魔王と関連している可能性を捨てきれない。
……だから姫様は俺に依頼をしたのか？
真意を確かめてみたいが、ルリアたちを待たせている。
まあ、実際に行って確認すれば済むだろう。
「報告書はあとで送るので、それを確認して今度の調査の参考にしてください」
「わかった。お前がいいなら止めないよ。気を付けろよ。ただでさえお前は、いろんなやつらに狙われているんだ」
「大丈夫。俺には頼もしい仲間がいますから」
「そうだったな」
魂で繋がった精霊王様たちや、ルリアたちの存在は、俺をいつだって強くする。
たとえ魔王が相手だろうと、負ける気がしない。
「何かあれば連絡しろ。世界の反対にいても駆けつけてやる」
「ありがとう」
兄さんもいてくれる。

独りぼっちだった過去の自分が、今の姿を見たら驚くだろうか？
いいや、驚くことすらできなかったな。
しかしその後、精霊王様方のお陰で感情と魔力を手にして――それでも辛い環境から抜け出すために家を出た。もう二度と戻らないことも覚悟していたし、そうなるだろうと思っていた。
なのになんの因果か、再びこの地に舞い戻り、こうして家族と会話できる。
日常の中にある幸福を噛みしめつつ、俺は馬車へと乗り込んだ。
「お待たせ」
ルリアが「もういいの？」と聞いてくる。
「ああ」
「それじゃ、帰りましょう。私たちのホームへ」
馬車に座り、ルリアと手を重ねて、俺たちは出発した。
懐かしき屋敷から、みんなが待つ我が家へ戻るために。

◇◇◇

馬車の中で、ルリアたちに姫様からの依頼について共有した。

ルリアが言う。
「引き受けることにしたのね」
「ああ。ちょっと遠回りになるけど、構わないか？」
「アスク君の好きにすればいいと思うよ！」
真っ先にアリアが同意して、それに合わせるように他のみんなも受け入れてくれた。
そう言ってくれることはわかっていた。
最後、ルリアがまとめるように言う。
「アスクが決めたことなら、私たちもついていくわ」
「ありがとう」
今、馬車は街道を進んでいる。
王都周辺は道が整備されているから、揺れはなく、快適だった。
しかし目的の場所へ向かうためには、整備された街道を外れていく必要がある。
徐々に道は険しくなり、揺れも大きくなる。
目的地は森を越えた先にあるらしい。
まだ木々に隠れて見えないが、異様な気配を感じるな。
「アスクよ、気付いているか？」

「はい、先生」
サラマンダー先生が話しかけてくれた。
感じている。
これは威圧感というよりも……違和感に近いだろう。
何かが不自然だった。
言葉では表現できないし、今のところ不調や危険があるわけでもない。
だからこそ、違和感としか表現できないのだ。
「この先から感じるのは魔力……でしょうか？」
「そうだが、不思議な気配が混じっているようじゃのう」
「違う気配？」
「わからぬ。実際に触れて、見て、確かめる他ないのう」
ノーム爺の言う通りだ。
きっとこの違和感の正体は、俺たちが目指している場所にある。
辿り着けば嫌でもわかるはずだ。
そう思い、俺たちは馬車を走らせる。

王都を出発してから四日後――
俺たちはついに、目的の場所に辿り着いた……はずだったのだが――
「な、何もありませんね」
ラフランがそう呟き、バーチェが石ころを蹴飛ばして言う。
「本当にここであってんのかよ！」
「依頼書の地図だとこのあたりで間違いないようね」
セシリーが依頼書を広げて確認してくれた。
アリアも覗き込んでいるが、たぶん難しくてよくわかっていないだろう。
そういう顔をしていた。かと思うと、いきなりこちらを向く。
「ねぇアスク君！　さっきから変な気配がしない？」
「アリアも感じるのか」
「うん」
「もしかして敵か！」
バーチェが早速ビビる。
「うーんと、敵意とかそういう危険な感じじゃなくて、えーっと……」
「違和感だろ？」

「そう！　変な感じがある！」
アリアも俺と同じような感覚を覚えていたらしい。
聖剣を持つ勇者だからか。
もしくは俺の眷属として契約を結んでいるから、俺との感覚を無意識に共有しているのか。
念のため、精霊使いのルリアにも確認する。
「ルリアはどうだ？　何か感じる？」
「そうね。違和感とは少し違うかもだけど……さっきから風の流れが不自然だわ」
「風？」
耳をそばだて、感覚を研ぎ澄ます。
シルも俺の周りをぐるりと一周して、何かを感じ取ったらしい。
「アスク！　確かに変だヨ！」
「風がこのあたりを避けていますね」
「うん！　まるで――」
「見えない何かを避けているように」
俺は慎重に前へと進んでいき、シルにも協力してもらいながら周囲の風の流れを感知する。
「ノーム爺、このあたり」

「うむ。地面にかかる重みが違うようじゃな」
ノーム爺もそう言っているし、どうやら間違いない。
見えていないだけで、ここには何かある。
しかも巨大な何かが。
俺はそっと、見えない何かに触れるように手をかざした。
その瞬間、ばちっと火花が散る。
「アスク！」
「アスク君！」
俺のことを心配してくれたルリアとアリアに、すぐに応える。
「大丈夫。ちょっと驚いただけで痛みもない。それより……」
「お、おい見ろよ！」
バーチェが指を差す。
俺が触れた箇所から空間に波が発生し、少しずつ歪んでいく。
まるで透明なカーテンが揺れているようだ。
やがてその内部に隠れていたそれは、俺たちの前に堂々と姿を見せる。
「で、でかっ！」

バーチェが驚いてあとずさった。
俺たちも驚きのあまり、思わず目を丸くして見上げてしまう。
これほど巨大な建造物が目の前にあったのに、全く見えていなかったなんて。
おそらく王城よりも大きい。
岩と、ブロック状の建物が交じり合ったような、奇妙な形をしている。
「驚いたわ。さっきまで何もなかったのに……これはまさか……」
「ああ。おそらく偽装の魔法だ」
セシリーは魔法使いだからすぐに気付いたな。
偽装魔法は、認識や視界を誤認させる魔法の一つ。
対象物がいかに巨大であれど、そこから意識をそらさせる効果があるため、俺やアリアが違和感を覚えなければ、この建造物に気付けなかっただろうな。
触れればその効果が解け、誰もが見えるようになるわけだが。
この効果は、結界に付与されていたのか？
そんな情報は依頼書には載っていなかった。
依頼書には、どんな攻撃も通じない結界に阻まれているとしか……。
「どういうことだ？　結界の効果が変わったのか？」

俺の呟きに反応して、セシリーが言う。
「だとしたら、人為的なものよ。結界の組み替えは簡単じゃないもの。誰かはわからないけど、魔法使いが、この結界を作って維持していると考えるのが妥当かもね」
セシリーは周囲を警戒し、結界の術者がいないか見まわす。
俺もシルとノーム爺の力を借りて、周囲に誰か隠れていないか探ってみた。
しかし動物や魔物の気配はあれど、それらしい人物はいない。
違和感のある魔力の流れも、周囲からではなく、この巨大な建造物の内部から感じる。
俺は言う。
「周囲にいないとなれば……中に隠れているかもしれないな」
「どうするつもり？」
ルリアの問いに、少しだけ考える。
最早ただの建造物ではないことは、はっきりとわかった。
今のところ攻撃されてはいないが、危険でないとは思えない。
まあそうはいっても、進むことは決めている。
問題は、全員で中に入るかどうかだ。
中にどんな危険があるかわからない。

アリアやセシリーの実力なら問題ないし、ルリアも強くなっている。
ただ……。
「全員で入るのは危険ね」
俺の心情を代弁するように、ルリアが口を開いた。
「ルリア」
「考えているんでしょう？　全員で入るべきか」
「ああ、正直何があるかわからないから、俺一人で行くことも考えたんだが……」
「私は一緒に行くよ！」
アリアが元気いっぱいに手を挙げた。
そう言うと思ったよ。
「……そもそも、中に入れるかどうかだけどね。偽装の魔法が追加で施されただけで『どんな攻撃も通じない透明な壁』が健在だっていう可能性だってあるんだから」
セシリーが言う。
そう、建造物は結界で囲まれている。
今も目には見えないが、透明な壁があるのは確かだ。
「大丈夫です。さっき触れた時に確認しましたが、この結界は――」

俺は結界に手を伸ばす。
まるで何もないかのように、俺の手は結界をすり抜けた。
「俺のことを阻んでいない」
俺はそう言うと、結界の内部に足を踏み入れる。
「ほんとだー！」
「私も大丈夫みたいね」
「気持ち悪いけどすんなり通るな」
アリア、ルリア、バーチェも問題なく結界を素通りできるらしい。
しかし、他の三名は違った。
「どういうこと？　私は弾かれるわ」
「ボクもだよ！」
「わ、私もです」
全員が結界を通れるわけではないらしい。
セシリーたちは結界内に一切侵入できないようだ。
魔法使いであるセシリーが通れないということは、魔力の強さが通れるかの基準ではなさそうだ。
入れる者の共通点……。

「精霊か」
「精霊？　そっか！　僕はアスク君と、ルリアは風の精霊と契約してる」
「バーチェに至っては、元は闇の精霊だからな」
「ん？」
バーチェはきょとんとした表情で俺を見ていた。
子供ではあるが、バーチェは悪魔である。悪魔は、人間の負の感情から生じた闇の精霊が進化した存在だから、結界を突破できたのだろう。
もっとも当のバーチェは自身がどういう存在なのか、イマイチわかっていない気がするが。
ともあれ、共通点はわかった。
だが精霊に関わる者だけが通れる結界なんて、俺でも作れない。
果たして、これはなんなのだろう。
「先生、どう思いますか？」
「なんとも言えないな。だが、精霊の気配は感じられん」
続いて、ノーム爺が言う。
「建造物そのものに魔力が流れておるようじゃ。この物体全てが巨大な魔導具と考えてよいじゃろう」

立ち読みサンプルはここまで

「巨大な魔導具……か」
こっちには魔導具の専門家がいる。
ちょっと頼りないけど、バーチェを連れて中に入れば、この建造物を解析できるかもしれない。
「よし。入れた者だけで先に進もう。セシリーたちは馬車を守っていてくれ」
「わかったわ。アリアたちが暗黒大陸に行っている時に、バングラドの留守を任されたのを思い出すわね」
セシリーがちらっと見た先で、アリアが元気な声を上げる。
「今回も大丈夫だよ！　行ってきまーす！」
「お兄さんも気を付けるっすよ！」
「無事に戻ってきてください」
そんなラフランとリズの言葉に、俺は「ああ」と頷く。
そして先に進もうと振り返ると――バーチェがこっそり結界の外に出ようとしていた。
首根っこを掴む。
「お前はこっちだ」
「なんでだよ！　どう考えても危険じゃんか！」
「どうやらこの建造物全体が魔導具らしいんだ。お前が一緒にいてくれなきゃ困る」